

II - 17

急性アルコール肝障害における Fat-storing cell の動態について

松崎研一郎、横井幸男、宮崎招久、
田島純子、白井 康、黒田博之、浪久利彦
(順天堂大学・消化器内科)

肝の線維化には伊東細胞 (FSC) の関与が推測され、線維化あるいは瘢痕化組織に見出されているが、その同定は容易でない。われわれは、筋中間径フィラメントの構成蛋白であるデスミンがラット肝の FSC に存在することを報告した。今回はラットにアルコールを投与し実験的に肝線維化を作成し、特に肝細胞周囲性線維化における FSC の役割を検討した。FSC は抗デスミン抗体を用いた酵素抗体間接法により観察し、肝の線維化は絶食下で1日2回アルコールを経口的に投与して作成し、コントロール群には等カロリーの糖液を投与し、経時的に屠殺して肝組織の検索を行った。結果：肝小葉内 FSC 総数はアルコールの投与日数に従って減少し、中心帯と門脈域周囲に著しい減少がみられた。FSC の胞体はやせ、細胞突起は短縮減少した。これらの変化はコントロール群にもみられたが、アルコール投与群により著明であった。FSC の減少と肝小葉内線維化とは逆相関を示した。結論：アルコールのみの投与により肝の線維化を作成しえたが、FSC も非活動状態となり、本実験条件下では線維化と FSC との関連は少ないものと考えられた。

II - 18

ラット肝癌発生過程後期における AFP 陽性細胞の生物学的意義

—免疫組織化学およびオートラジオグラフィ—を用いて—

岩井眞樹、瀧野辰郎*、井端泰彦**
(*京都府立医大三内・**同第2解剖)

ラット肝癌発生前の肝過形成結節は、ひとつの前癌性病変と言われ、結節形成時に癌胎児性蛋白が産生されとの報告がある。我々は、結節形成時のラット肝を用い、免疫組織化学的に α -fetoprotein (AFP) 陽性細胞を観察した。同時にオートラジオグラフィにて AFP 陽性細胞の細胞増殖活性を測定し、発癌における AFP 陽性細胞の生物学的意義について検討した。方法：0.06% 3'-Me-DAB をラットに投与し、12・14・16週目の結節形成を認めるラット肝を PLP にて固定、酵素抗体法を用い AFP 陽性細胞の光顕および電顕の観察を行った。又屠殺前19・11・3時間前に ^3H -thymidine (1 $\mu\text{Ci/g}$) を投与し、免疫組織化学に用いた同一切片にて、dipping 法によるオートラジオグラフィを行い、AFP 陽性細胞の標識率を求めた。結果：AFP 陽性細胞は3種類の異なる形態を示し、それぞれ同一細胞からなる foci および結節を形成した。標識率は、正常肝で 2.95%, AFP 陽性 foci および結節で、7.48%, 19.04%, 21.01%, 肝癌で 64.0% を示した。結語：発癌後期に認める AFP 陽性細胞群で細胞増殖活性の高い foci および結節は、今後発癌母地として検討に値するポピュレーションと思われる。